

横須賀市吉井城山第一貝塚出土の骨角牙器・貝製品(二)

神 沢 勇 一

四二

一、混貝土層出土の骨角器

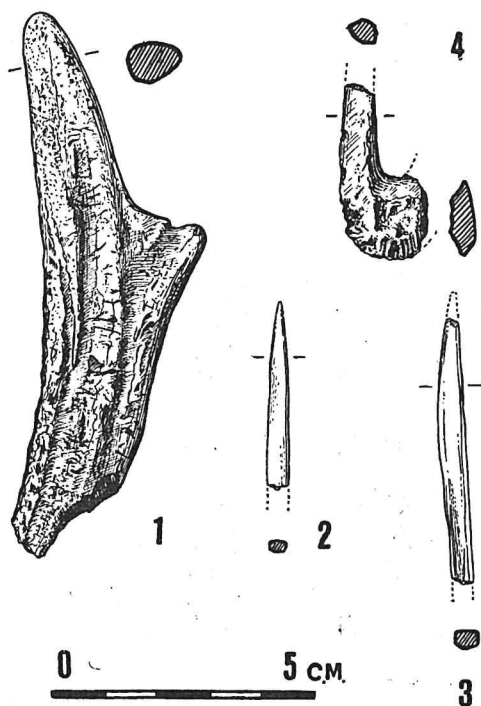
茅山上層式土器を包含する下部貝層と加曾利E式土器を包含する上部貝層にはさまれた薄い混貝土層からは、茅山上層式土器・花積下層式土器・関山式土器・諸磯b式土器・十三菩提式土器・阿玉合式土器等とともに、七個の骨角器が出土している。それらは、いずれも破片であるうえに共伴した土器型式も明らかでなく、資料的価値が低いので簡単に説明するにとどめておきたい。

なお、それらの種類別個数は尖頭骨角器三、釣針形角器一、その他三である。

尖頭骨角器(第一図1・2・3)

鹿角の先端を自然の形態のままに利用したもの(1)と、打割った骨片の一部分に簡単な加工をして製作された不定形の粗製尖頭器(2・3)とがある。

1は鹿角の第三区以上の断片で、現存長一〇・四cm、角冠を先端としており、この部分が著るしく損耗し、先端に対して横および斜に鋭い傷痕が多数残されている。おそらく本例は、単なる刺突以外に、かなり粗い用途をもっていたものであろう。なお、下端は折損したもののようである。2は細い骨片の一端を研磨して尖らせ、刺突具とした



第 1 図
吉井城山第一貝塚混貝土層出土の骨角器

ものである。3も2と同じ手法で製作されているが、骨片の原形を強くのこす。基部は側面の一方が意識的に欠きとられ、他方には二カ所に帯状の浅い凹みがつけられている。ともに柄に装着するための加工と考えられる。

$$2 \parallel (3 \cdot 6) \times (0 \cdot 3) \times (0 \cdot 2) \text{ cm}, 3 \parallel (5 \cdot 2) \times (0 \cdot 5) \times (0 \cdot 4) \text{ cm}.$$

釣針形角器 (第一図4)

いわゆる釣針の形態と機能をもっと考えられるもの。鹿角製。軸の頂部と針部を欠失している。器面の整形はきわめて粗雑であり、製作途中で破損した未製品とも考えられる。現存長三・四cm、巾一・六cm、弯曲部は巾が広く一・五cmあり、内・外縁とも両側から削られているが、内側はほとんど片側からのみ削られているような形状を示している。

その他の骨角器

混貝土層出土の他の三例は、尖頭骨器または銛形骨器と考えられるものの基部断片で、いずれも端が磨かれて鈍く尖っている。

二、上部貝層出土の骨角器

加曽利E式土器を包含する上部貝層からは、一三個の骨角器が出土した。その種別個数は尖頭骨角器二、鏃形骨角器三、銛形角器二、その他六である。

尖頭骨角器 (第2図1・2)

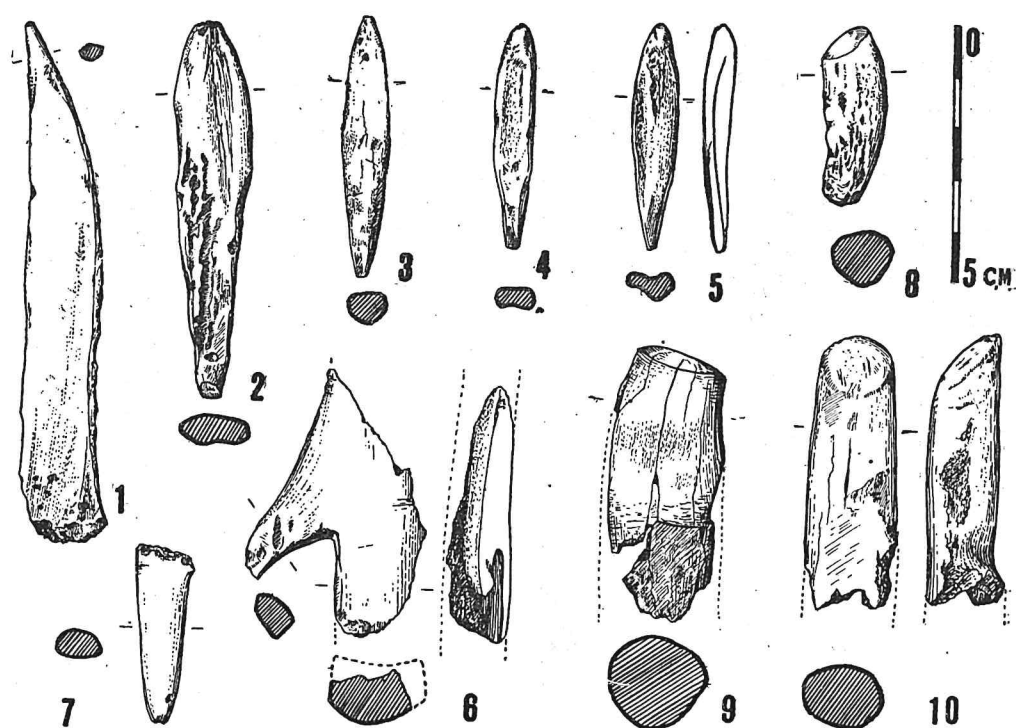
原材料に部分的な加工を施して製作された不定形の粗製尖頭器で、早期におけるそれと基本的に異なるところはない。

1は打割った骨片の細く尖った方の端を、若干研磨して、先端としたもの。他の部分は打割ったままで、特別な加工の痕跡は認められない。2は鹿角の断片に加工したもので、やや整っている。先端は扁平で鈍く尖り、胴部中央から基部にかけては、両側面が粗く削られて巾がせばまるが、これは柄を装着するための加工と考えられる。また基部末端は、上下両面から斜に截落されたような形で、幾分尖る。

$$1 \parallel 1 \cdot 0 \cdot 2 \times 1 \cdot 5 \times 0 \cdot 4 \text{ cm}, 2 \parallel 7 \cdot 3 \times 1 \cdot 2 \times 0 \cdot 6 \text{ cm}.$$

鏃形骨角器 (第2図3・4・5)

鏃を思わせる小形の尖頭器である。形状はそれぞれ異なっているが、いずれも先端が厚味をもって鈍く尖り、それに対して、基部が細くなつて



第 2 図 吉井城山貝塚上部貝層出土の骨角器

いる点に共通性が認められる。

3 は鹿角製(?)で棒状を呈し、側面からみると、片面はほぼ平坦であるが他面はかなり彎曲している。胴部中央から以下の部分は、両側面および下面から削られて、巾が細まり、この部分に粗い擦痕がある。基部末端では、さらに上面からも研磨が加えられている。

4 は骨製で、基部の側約三分の一ほどの部分が、両側面から削られて、そげたように細くなり、基部末端は上面からも斜に研磨されて尖る。

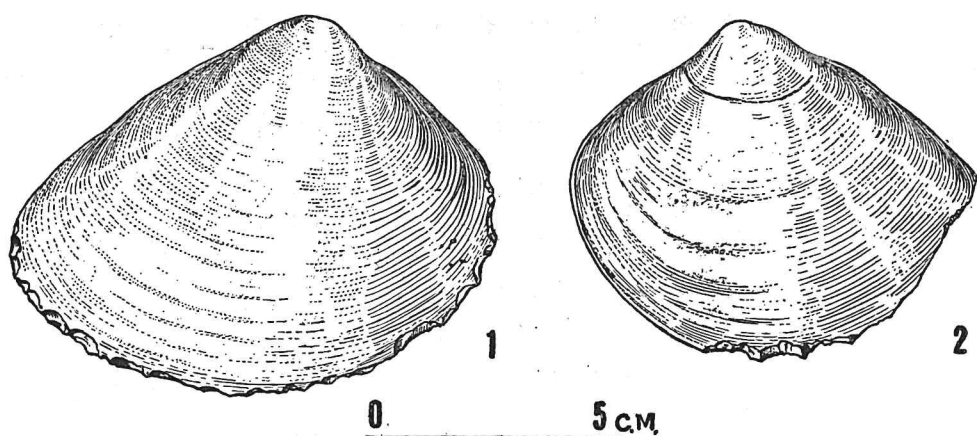
5 は、関節に近い部分の彎曲した骨片から作られており、厚味のある関節側を先端とし、ほとんど周囲だけを磨いて整形されている。基部の両側面に、削いだような研磨の痕跡が認められる。

3 $\parallel$ 五・二 $\times$ 〇・九 $\times$ 〇・七 cm 、4 $\parallel$ 四・四 $\times$ 〇・七 $\times$ 〇・四 cm 、5 $\parallel$ 四・四 $\times$ 〇・八 $\times$ 〇・五 cm 。

銚形角器 (第2図6・7)

顎をもつ鹿角製の銚形角器が二例あるが、小破片のため、全体の形状は明らかでない。

6 は大形の銚形角器の胴部破片である。断面形は、鹿角の外側にあたる面を上にした場合、底辺が浅く凹んだ半円形状を呈する。研磨は両面に加えられているが、上面がかなり滑らかであるのに対して下面は角の中心部の組織が露出し、器面が粗い。なお、顎部前縁の部分は、両面から斜に研磨が加えられ、刃のような形状を示す。



第 3 図 吉井城山第一貝塚上部貝層出土の貝刃

7 は、やや小形の銚形角器の基部断片で、折損部右端に頸の痕跡がある。器面は全体によく研磨されている。なお、頸部に接する基板上半部の側面は、この部分のみ特に下面から斜に研磨が加えられて、薄くなる。

6 $\parallel$ (五・二) $\times$ (三・五) $\times$ (〇・八) cm, 7 $\parallel$ (三・五) $\times$ (〇・八) $\times$ (〇・五) cm。

その他の骨角器

斜に研磨された一端を有する角製品。

小形の完形品一例(8)と、それよりも大形の断片二例(9・10)があるが、前者と後者が同一種類のものかどうかは不明である。

8 は完形で、巾の広い方の端にだけ研磨が加えられ、他の部分には何等の加工もおこなわれていない。全長三・四 cm、頂部の研磨面は、〇・九 $\times$ 一・〇 cm である。

9 は端の形状において 8 に酷似するが、かなり大形で、研磨は周囲にも加えられている。現存長五・二 cm、端の研磨面は一・七 $\times$ 一・八 cm である。

10 は前二例よりも端部の傾斜が強く、全体がよく磨かれており、また折損部に近い片側に巾約一・〇 cm の凹みをもつ。本例は大形角器の基部の可能性もあるが、端部の研磨面に使用痕とおぼしい細かい傷痕があり、先端にも僅かながら欠損が認められるので、やはり研磨面を利用したものであろう。現存長五・三 cm。

三、上部貝層出土の貝製品

上部貝層から出土した貝製品は六個で、二枚貝の背面に穿孔したもの(二個)と、二枚貝の腹縁に加工したもの(四個)との二種類がある。

二枚貝の殻に穿孔したもの

いわゆる貝輪とは幾分性格を異にする貝製品である。一例は、一五×一〇cmのミルクイの殻の中央に三×三cmの孔を穿ったもの。他の一例は一〇×九cmのイタボガキの殻に三×二cmの孔を穿ったものである。ともに、穿孔以外には加工の痕跡は認められない。

二枚貝の腹縁に加工したもの（貝刃）

大形のハマグリ腹縁を、内側を押圧を加えて、連続的に小さく欠き取ったもの。腹縁全体が欠きとられる場合（第3図1）と、約半分が欠きとられる場合（第3図2）とがある。打欠かれた部分は粗雑な刃を形造っており、この部分を刃とした一種の搔器（scraper）と考えられる。なお、これらの形状は、下部貝層から茅山上層式土器に伴出したものと全く同じである。

上部貝層出土の骨角器ならびに貝製品は、以上に述べたとおり、種類・数量ともきわめて乏しく、下部貝層出土のものと対照的な存在を示している。これは、一には上部貝層の規模が小さいことにもよるであろうが、しかしそれを考慮に入れても、なお他の遺物の出土量と比較して決して多いとは言えない。したがって、上部貝層における骨角器の稀少性は、貝層あるいは発掘規模の大小によるものではなく、下部貝層と上部貝層における貝相の差異——下部貝層がカキを主体とするのに対して、上部貝層はほとんど小形の巻貝から成っている——に反映される自然環境の変化に、その主要な原因があると考えられる。

この上部貝層出土の骨角器ならびに貝製品の特徴その他については、資料が少ないので、云々することを差控えたいが、強いて言うならば、尖頭骨角器や鎌形骨角器にみられるような、先端に厚味をもたせて鈍く尖らせ、基部を細くした器形は、一つの特徴となし得るかも知れない。また、今後の問題としては、中期末における尖頭骨器や貝刃のような粗製品のあり方を、改めて検討してみる必要があると思われる。